

## 書評 『ワイルド・スワン』上・下

◇ユン・チアン著 土屋京子訳 ◆ 講談社 1993年 1月25日◇

鷺巣益美

- イギリス作家協会年間最優秀ノンフィクション賞
- イギリス・NCR文学賞ノンフィクション部門賞
- 「ELLE」フランス版、読者賞

発売後十一か月で八十一万部を突破したという。読売新聞に掲載される週間ベストセラー（トーハン調べによる。十位まで発表）の文芸部門には十一月半ばまでランクインしていた。

文化大革命の記録ならば何冊も出版されているが、これほど売れたものはない。いちいち書名を挙げないが、これまでに出了ものはほとんど、著者自身のことしか書かれていなかった。悲惨な迫害の体験や自分への問いかけが延々と綴られていたが、著者がそういう状態に至るまでの経緯や周りの状況がいまひとつはっきりしなかった。そこで、“文革もの”が翻訳されるたびに手を出すことになるのだが、十人いれば十の文革体験があるということだけはよくわかったが、ではなぜそういうことになってしまったのかという疑問に十分答えてくれるものはなかったように思う。

そういった“手記”を越えた文革の記録が求められていたところへ登場したのが、『ワイルド・スワン』だった。疑問がすべて解けるというわけではないが、この手のものにしては珍しく、一步引いた形で書いているな、という印象を受けた。一家の歴史の大部分を第三者の目で見、祖父母や両親の物語として描いたことであまり感情に走らず、客観的な書き方になっていると思う。訳書にしる映画にしる、言葉は悪いが「お涙ちょうだい」的な文革体験記が多いことにいささか辟易していたところへ、新鮮な感じもした。

誤解のないよう付け加えておけば、「お涙ちょうだいの文革体験記はもういらない」というのではない。いろいろな体験、見解を知ることもおろそかにはできない。ただ、完全に突き放して見るのは無理にしる、もう少し違った角度から捉えられないものか、と以前から思っていたのである。

著者ユン・チアンの一家も、格好の材料だった。軍閥將軍の妾だったことがあり、その後自らの意志を貫いて再婚した祖母、日本占領下の満洲国に育ち、

国民党の人間と関わったことのある母、ばか正直すぎて母につらくあたることになり、文革期には迫害を受けたばかりか精神に異常をきたしてしまう父、そして辛い目に遭ったとはいうものの、大学を卒業しイギリス留学を果たした著者。「十五歳で、私の祖母は軍閥将軍の妾になった。」という書き出しに、思わず引きずりこまれてしまったのは私だけではあるまい。うまく立ち回ることができず、能力やチャンスをじゅうぶんに生かしきれなくて、時代の波にもまれてきた一族だったが、この本が世界各国で売れたことで、ようやく日の目をみたことになるのだろうか。

この本の中国語の題名は『鴻』である。著者によれば“「鴻(ホウ)」は、野にはばたく白鳥(ワイルド・スワン)をあらわす。”という。単に母の名・徳鴻(トクホウ)と、著者もとの名・二鴻(アムホウ)から共通した一字をとり自分たちの物語であるとしただけでなく、これから作家としてはばたこうというユン・チアンの意志もこめられているのだろう。次作に予定しているという『毛沢東伝』で、より突き放した書き方で毛沢東の人間像を浮かび上がらせてくれることを期待する。

\* \* \*

私の覚えている限りでは、ユン・チアン、陳凱歌、張芸謀、謝晋、崔健といった人々が、全国ネットの電波に乗って画像とともに紹介された。メジャーな週刊誌の表紙になった人もいる。知名度を上げるには格好の場だが、その作品までをも広げることができたのはユン・チアンだけではないか。なぜなら、作品に触れたいと思ったとき、書物ならばたやすく手にいれることができるからだ。地方にいと、中国映画を映画館で見る機会などめったにない(蛇足：香港のある一連のアクションものは除く)。

\* \* \*

台湾では『鴻——三代中國女人的故事——』という書名で92年9月に出版されているが、“打倒蔣介石”を意味するスローガンの見える写真を削除し、かわりに母や夫(イギリス人)とのスナップやイギリス・NCR文学賞受賞式での写真を追加してある。イギリス版『WILD SWAN · Three Daughters of China · 』には事項・人名のインデックスがつき、使われている写真は日本版と同じである。

\* \* \*

二十代女性向けのファッション情報を中心とする雑誌『with』(講談社刊)に、『ワイルド・スワン』の広告が載っていた。中国にさほど興味もなかった人を巻きこんで、まだまだ底辺は広がりそうである。